

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12885

研究課題名（和文）商店街における「街商人」の役割に関する研究

研究課題名（英文）Research on the role of "town merchants" in shopping districts

研究代表者

渡邊 孝一郎（WATANABE, KOICHIRO）

香川大学・経済学部・准教授

研究者番号：60616671

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の研究成果は大きくは、第一、街商人の存在が商店街さらにはその地域の活性化に貢献しているメカニズムを明らかにしたこと、第二、経営意識の違いによって優先される情報が異なり、それが結果としてより多様な品揃えを商店街単位で可能にしていることを明らかにしたこと、第三、非街商人によるまちづくり活動の可能性を検討した点、この三点に集約することができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の研究成果の意義としては大きく三つあり、第一に街商人が様々な経営意識を持つ商人にまちづくり活動に参加させることで商店街という商業集積に「依存と競争」のメカニズムを起動させるきっかけを提供していたことを明らかにした点、第二に消費者情報や地域経済情報といった様々な情報と品揃え物の関係性を明らかにした点、第三に街商人以外の者によるまちづくり活動の可能性を検討した点である。

研究成果の概要（英文）：The research findings can be summarized as follows: Firstly, they shed light on how the presence of town merchant plays a role in rejuvenating shopping streets and the broader area. Secondly, they uncover how differences in managerial awareness lead to diverse prioritization of information, thus allowing for a wider range of products to be offered at the street level. Lastly, they explore the potential of community development activities not led by town merchants.

研究分野：商学

キーワード：街商人 まちづくり

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

商店街の衰退が叫ばれて久しい。現場での様々な試行錯誤や政策・支援が打ち出されているものの改善の見通しは立っていない。商店街実態調査においても、「繁栄している」と答える商店街の割合は1~3%という状態が10年以上続いている。そういった中で昨今の商店街活性化を語る上で欠かせない概念となっているのが「まちづくり」である。それまでの経済的合理性という観点だけではなく社会的有効性という観点からも商店街は地域にとって欠かせない存在として扱われるようになってきている。

本研究ではこのような「まちづくり」活動で重要な役割を果たしている「街商人(まちあきんど)」に注目する。その理由としてこれまでの商業論においては、街商人のまちづくり活動が有効的であるという説もあれば、企業家商人のように自店の経営に集中すべきとの説もあり、街商人の存在価値や街商人が商店街に与えるパフォーマンスについて意見が分かれていたためである。果たして街商人は商店街活性化においてどれほどの影響力を持ち合わせているのか、この問題意識から研究が開始された。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、商店街における「街商人(まちあきんど)」概念について検討することである。具体的には、従来から商業論で前提とされてきた企業家商人に加え、近年注目されている街商人を商業論でいかに取り込むか、また街商人が商店街のパフォーマンスに与える影響について検討する。そこから商業論における商人像のダイナミクス性を考慮した商業集積発展モデルも検討する。

### 3. 研究の方法

基本的には質的調査を中心に調査・分析を行った。具体的にはまずは地域商業の象徴である商店街に属する商人に対して複数のインタビュー調査を行うとともに、街商人だけではなく様々なタイプの商人(企業家精神を持った商人や自己目的志向の商人等)や、商店街を支援する機関等にもインタビュー調査を行った。

### 4. 研究成果

本研究の研究成果は大きくは、第一、街商人の存在が商店街さらにはその地域の活性化に貢献しているメカニズムを明らかにした点、第二、経営意識の違いによって優先される情報が異なり、それが結果としてより多様な品揃えを商店街単位で可能にしていることを明らかにした点、第三、非街商人によるまちづくり活動の可能性を検討した点、この三点に集約することができる。

第一に街商人の存在が商店街さらにはその地域の活性化に貢献しているメカニズムを明らかにしたことである。具体的には近年、商店街の三種の神器とされる「バル」「まちゼミ」「100円商店街」に代表される各種イベントは街商人を中心として実施されており、これら活動によって停滞・衰退傾向にある商店街の多くで各店舗の売上増加や新規顧客の獲得が達成されている。ここには各種イベントの実施方法やノウハウといった情報の収集・集約、商店街メンバー間の意思や利害関係の調整、イベントの実施・周知・広報などの様々な面で街商人の存在が大きく関係していた。そこではいわゆる企業家精神や自己目的志向を持った商人を巻き込む形で行われており従来、商店街活動やまちづくり活動に興味・関心が低いとされる商人にも参加させることで商店街という商業集積に「依存と競争」のメカニズムを起動させるきっかけを提供していた。

これまでの商業論において街商人についてはまちづくり活動や地域のイベントに積極的に参画することで商店街や地域に貢献しているとしていた。本研究ではそういった現象が街商人による「依存と競争」のメカニズムの再起動という形で実現されていることを明らかにした。商業集積を効果的に機能させる前提条件に街商人を組み込んだ点で意義のある成果であると言える。

第二に経営意識の違いによって優先される情報が異なり、それが結果としてより多様な品揃えを商店街単位で可能にしていることを明らかにしたことである。商店街には様々な経営意識を持った商人がおり、それぞれの商人が反応するあるいは積極的に収集する情報も異なると考えられる。消費者に関する情報や生活者としての情報、地域経済や地域文化といった様々な情報に優先順位をつけて取捨選択していく過程で自身の品揃え物にもその情報が影響してくる。それら情報と品揃え物の関係性を検討し、明らかにした点に意義があると言える。

例えば、ある地域商業者が、誰と、どのようにつながるかで得られる情報は変わる。その場合、同じ経営意識の地域商業者同士のほうが結びつきやすい一方で、そのような結びつきでは同類の情報だけが精緻化されるため、必ずしも効果的な関係とはいえない。むしろ、基本的には異なる経営意識の地域商業者との関係を構築した方が、より効果的なリソースとしての情報を得ることができ、あるいは新たな情報やその活用方法を見出すことで異なる次元での成長を遂げることが出来る可能性がある。そういった点で多様な商人、さらには地域の関係者となつながらいる街商人の存在は貴重であり、商店街全体としての品揃えやサービス向上に大きく影響している。

第三に非街商人によるまちづくり活動の可能性を検討したことである。今回の一連の研究は2019年から始めたものであるが、奇しくも研究活動が本格化する時期に新型コロナウイルスが感染拡大し、それまでの当たり前だった生活様式が一変することとなった。今回の研究活動においても本来想定していた調査が十分に行うことができず苦労したが、商店街においても緊急事態宣言などこれまで経験したことのない事案が発生し、全国各地で地域商業者が苦境に立たされた。街商人も例に漏れず、自身の店舗経営自体も厳しくなる環境下で、これまでのような集客を中心としたまちづくり活動も十分に企画もしくは実施できない事態となった。こうした事態に活躍したのが商店街を支援する外部の協力者の存在であった。そこではオンラインツアーという新たな取り組みを自身が管轄する商店街に積極的に周知し、各商店街の街商人と協力し、各商店街の特性に合わせながら実施していく事例が確認された。

今後、商店街を取り巻く環境が厳しくなる場合、商売で生計を立てている街商人としてはこれまで通りまちづくり活動に時間や資源を分けられなくなる可能性が出てくる。そういった場合、まちづくり活動を別に担う存在が必要となってくる。その際に、多くの商店街関係者とつながりを持ち、様々な知識や実績を蓄積している支援者の存在が重要となってくる。その役割を主に担うのが商店街支援の専門家、例えば商店街連合会のような存在であると考えられる。彼らはもちろん商人ではないが、街商人とは異なった点、例えば複数の商店街での知識やノウハウの伝達・共有、利害関係から離れたところからの支援等が可能であり街商人が主体となるまちづくり活動とは異なった形で活動が可能になると考える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Myungrae Cho and Koichiro Watanabe	4. 巻 1
2. 論文標題 Retail skills as the craftsmanship of liquor retail SMEs	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Advances in Physical, Social & Occupational Ergonomics	6. 最初と最後の頁 30-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-030-80713-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 渡邊孝一郎・松田温郎	4. 巻 67
2. 論文標題 地域商業者の経営意識に基づく品揃え物の構想に関する試論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山口経済学雑誌	6. 最初と最後の頁 59-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡邊孝一郎	4. 巻 96
2. 論文標題 商店街におけるオンラインツアーの可能性 - 商連かながわの事例を通して -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 香川大学経済論叢	6. 最初と最後の頁 113-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 趙命来・渡邊孝一郎・向山雅夫	4. 巻 96
2. 論文標題 Technology versus skill as a competitive advantage in retail ; A case study of eyewear retailers	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 香川大学経済論叢	6. 最初と最後の頁 197-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Myungrae Cho and Koichiro Watanabe
2. 発表標題 Retail skills of small independent bookstores that support local culture and economy
3. 学会等名 2023 International Forum on Distribution Convergence (IFDC2023) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Myungrae Cho and Koichiro Watanabe
2. 発表標題 Retail skills as the craftsmanship of liquor retail SMEs
3. 学会等名 12th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊孝一郎 趙命来
2. 発表標題 中小小売業における小売技能概念の検討
3. 学会等名 日本商業学会 九州部会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊孝一郎, 松田温郎
2. 発表標題 地域商業者の経営意識に基づく品揃え物の構想について
3. 学会等名 日本商業学会九州部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Cho Myungrae, Watanabe Koichiro
2. 発表標題 “Retail skill” as a competitive advantage for small-sized retailers
3. 学会等名 ,3th International Conference on China-Japan-Korea FTA law Form(ICFF 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊孝一郎・松田温郎
2. 発表標題 地域商業者の経営意識に基づく品揃え物の構想について
3. 学会等名 日本商業学会九州部会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 東 伸一、三村 優美子、懸田 豊、金 雲鎬、横山 斉理	4. 発行年 2022年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 436
3. 書名 流通と商業データブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関